

# 日本人は五四運動をどう捉えてきたか

五四運動は一九一九年、山東半島の割譲問題をきっかけに発生した愛国運動であり、山東半島の領有権をドイツから譲り受けた日本に対する排日ナショナリズムを中心的な内容とするものだった。そのことに当時の大部分の日本人は無自覚であったが、八〇年後の現在も、日本の思想状況は当時からどれだけ変わったと言えるだろうか。五四運動発生時すでに、この運動の持つ重要性を自覚した少数の先覚者から、私たちが学ぶべきものはあまりにも多い。一九七〇年代から二〇年近くにわたって「五四」を巡る考察を持続した京都大学人文科学研究所共同研究班と共に、日本と「五四」の八〇年に及ぶ関わりを振り返る。

狭間直樹

（京都大学人文科学研究所教授）

×江田憲治

（京都産業大学外語学部教授）

×馮

天瑜

（愛知大学現代中国学部教授）

## 五四運動と大正日本の言論界

馮 中国の「現代」は五四から始まります。そしてこの中国の「現代」の開始にネガティブな意味で産婆役を果たしたのが日本です。第一次世界大戦後のパリ講和会議における、山東半島の利権のドイツから日本への割譲決定という外交問題が

五四学生運動の導火線であり、五四愛国運動はいわば日本の領土問題に触発された日本批判をその中心的な内容にしたからです。中国において一般的な内容にこうした認識が日本人々のあいだにどの程度自覚されているかに、私たち中国人は強い関心を持っています。狭間 中国の「現代」の始まりに日本が否定的な形で深く関与しているという認

識は、戦後日本において歴史認識として共有されるにいたったと言えるでしょう。ただ、戦後五〇年を過ぎた今、自国の歴史の嫌な面を見ないようにし、日本の中国に対する軍事的・経済的侵略を擁護しようとする動きが強まってきていることには、留意しておかねばならないでしょう。

ここで強調したいのは、五四運動と日

本との関わりという問題一つ取り上げて  
も、今指摘されたような認識が一般的に  
なるまでには、長い時間を要したとい  
うことです。少なくとも敗戦を境として戦  
前と戦後では、五四に対する日本の言  
論界の認識には大きなちががあります。  
そのことを理解するためには、まず、運  
動が勃発した一九一九年の当時、日本  
の言論界が五四をどう評価したかを見  
ておかねばなりません。

当時の日本のメディアで大きな発言力  
を持っていたものに『東京朝日新聞』が  
ありますが、同紙は五四運動によって巻  
き起こった対日ボイコットが、日清戦争  
以来積み重ねられてきた、中国の対日「誤  
解」の延長線上に起こったものであると  
判断しました。こうした「誤解」説のほ  
かに、当時の言論界で盛んに主張され  
たのは第三国（特にアメリカ）が中国世  
論を扇動したとする「扇動」説でした。

どちらも五四運動を引き起こした中国  
ナショナリズム、という要因にほとんど  
無理解でしたし、中国に現実起こって  
いる出来事を直視しようとしないうる

す。

馮 対日誤解説や扇動説以外に見るべき  
発言はなかったのですか。

狭間 ありました。現在も議論するにた  
る五四運動論を残したのは内藤湖南と吉  
野作造の二人です。内藤湖南はジャーナ  
リズム出身ですが、京都帝国大学文学部  
に招聘されてからは、『支那論』を始め  
とする中国問題での時事評論により、当  
時の日本の言論界に大きな影響力を持  
っていました。

他にも多くの識者が意見を述べていま  
すから、検討したいのですが、今は佐藤  
綱次郎陸軍中将が「支那人の無理解」を  
責めるより、まず日本人が反省して「真  
心の親切より出発する日支相互の理解」  
を確立する必要を強調している（『大阪朝  
日新聞』五月一三日）ことを挙げるに止  
めます。これは卓見です。佐藤中将はそ  
の翌年に『呪われた日本』を出して大戦  
後に孤立する日本の未来図を描く人です  
が、同仁会理事として国際的な視野を  
培っていたがゆえに、軍人とは見えぬ心  
情レヴェルの理解を提起できたのでし

う。

さて、吉野作造は当時、東京帝国大学  
法学部で政治学を講じていました。湖南  
のように中国を自己の専門領域とはしま  
せんでしたが、一九〇六年に袁世凱の長  
男袁克廷の家庭教師として天津に赴任し  
たということもあって、討袁の第三革命  
を機に、現代中国の政治動向に強い関心  
を示していました。しかも注意すべきは、  
五四運動勃発の当時は、一九一六年の「民  
本主義」の提唱以来、吉野の言論の絶頂  
期に当たっていたことです。

二人の五四評価はある意味では全く対  
極にありました。しかし、この対極をな  
す言説空間の広がりには戦後日本の中国認  
識の方向性を準備したという意味でたい  
へん重要なものだと思います。

湖南は山東問題に関して、日本は山東  
半島をドイツから中国に還付することに  
何ら異議を差し挟まなかったと日本政府  
を弁護した上で、五四学生運動は中国内  
陸部の経済活動の主導権を日本経済に奪  
われた中国人たちが、学生と一般民衆  
を利用して日本製品ボイコットを行わせ

た結果起こったものと考えた。そして、そのような商人や学生運動家による排日運動を取り締まることもできない北京政府の統治能力を問題視しました。

一九一六年五月に湖南が「**『外交時報』**に執筆した「支那時局私見」という重要な論文がありますが、この中で湖南は、現代中国を無秩序という理由から帝制に戻すべきだという意見を否定し、中国は共和制を維持すべきだと主張しています。だが、共和制を維持するためには現代中国の諸悪の根源である無力な中央政府を改造しなければならぬとして、湖南は、中央政府の権限を大幅に縮小し政治上の問題を外国が援助して解決するというプランを提唱しました。中央と地方政府の諸機関を外国人に開放するというのです。もちろん湖南のプランの中心は、外国人の中でも、とりわけ日本人が中国政府に参加するというものです。

江田 五四運動による排日運動の高揚は、湖南にますます中国政府の無力さと日本人が中国政府に参加することの必要性を自覚させました。湖南は、五四運動



..... 狭間直樹 [Hazama Naoki]

の中に新しい秩序への芽生えではなく、既存の秩序の崩壊と混乱を見ました。湖南からすれば、中国は国家を建設する能力を欠如していました。

日本が明治以後推進してきた中央集権的な近代国家を中国は自力で建設することはできない。経済と政治は日本に委ね、中国は文化の維持と保全に努めるべきだ。この湖南の持説を、五四運動はむしろ補強したと言えます。

## 吉野作造と中国ナシヨナリズム

馮 吉野作造の五四運動論は、湖南とは違って、日本の中国学生運動家に対する援助という社会実践を伴うものでしたね。五四運動の何が吉野をそうした行動に駆り立てたのでしょうか。

狭間 おつしやるとおり、北京で五四運動が勃発した直後の五月七日、東京でも中国人留學生が排日行動を起こしています。湖南はそうした排日運動が彼の理想としていた「日支親善」を崩壊させるものだとして危機感を抱き、先ほどのような言論を展開しました。それにたいし、吉野は中国人留學生の行動を擁護して権力の弾圧から守る道を選びました。日記によれば、吉野は五月一三日には逮捕された中国人留學生の保護を外務省に要請し、一四日には拘留留學生の弁護を相談、一七日には判事に保釈を掛け合い、二二日には釈放留學生の会に出席しています。

中国人留學生たちは運動を起こすにあたり、当然それなりの準備をしなければ

なりません。神田の「維新号」という華僑が経営する中華料理店は、五四の前哨戦、すなわち五四前年の「日華共同防敵軍事協定」反対運動（この時、吉野は既に中国人留學生の運動を支援していません）のさいの闘争本部といった役回りです。歴史的にはいささか有名なお店なのですが、今はホテル・ニューオータニの近くに移っているところへ、大分前に竹内実さんに連れて行っていただいたことがあります。話題が半世紀以上昔の五四のころの維新号に及んだとき、店の人がいかにも誇らしげだったのが今も印象的です。民族的な興隆の氣運が「敵地」にある留學生や華僑において具体的な形をとって現れ、数的には僅かなものだったとはいえ、吉野のような知識人はその動きの歴史的意義を認識して、積極的な支援行動に及んでいたわけです。

立場に立っていたのはどういうわけでしょうか。江田 確かに吉野は日本の二十一カ条要求を承認しましたが、青島還付問題の処理方法をめぐって、二十一カ条要求に対して懐疑的になっていきます。彼は二十一カ条要求にいう「日本租界」の中に青島を含めるべきではないと考えていました。最終的には一九二八年の南京国民政府の成立とともに二十一カ条要求を全面否定するにいたります。狭間 吉野は確かに二十一カ条を是認しました。しかし、それは「日本の本意」ではなく、「列国競争」の時代に「己むを得」ぬことなのだといひ、併せて「同情と尊敬」をもつて「将来の支那」に対すべしとの立場を表明しています。この立場が中国の改革にはげむナシヨナリストの支援へとつながるわけです。吉野は討袁第三革命の勃発とともに本格的に中国研究を開始しました。『吉野作造選集』第七卷（岩波書店、一九九五）の私の解説文をご覧ください。お分かり頂けると思いますが、吉野は共和制が風

前のももし火であるかのような中国政治の混乱と無秩序の中に、近代的な国民国家を構築するにたる新しいタイプの政治勢力、彼の使った魅力的な言い回しをつかえば「生きた精神」が成長しつつあることを肌で感じていた。そこで、湖南のように共和制が維持できないような無力な中央政府は日本人が援助せねばならないと論ずる代わりに、無力な中央政府に代わって共和制を軍閥政治の無秩序から守ることのできる新勢力が學生や労働者の間から生まれてきていると確信して、中国問題にたいする発言、執筆を精力的に行ないました。先に述べたように、中国のナシヨナリズムの新しい担い手への注目、彼が「民主主義」を唱えて、第一次護憲運動を中心とする大正デモクラシーのオピニオン・リーダーとなる時期と重なっています。資本主義の後発国で民主主義をいかに定着させるかが吉野の究極のテーマであり、中国もアジアという世界システムの周縁にあつて、日本と同じ民主主義の課題に直面しているというのが吉野の中

国観です。日本は欧化に成功し、中国は欧化に失敗した、ゆえに日本が中国を適当に処理すべし、と考えるような差別的、侵略的脱亜論の立場に立つのではなく、両国が対等の立場で連携できる道を求めていたのです。

馮 ナシヨナリズムという観点から整理すると、湖南は中国のナシヨナリズムを文化的なものと政治的なものに分けた上で、五四当時の中国には誇るに足る文化ナシヨナリズムはあっても政治ナシヨナリズムの確立には他者の助けがいると考えたわけですね。吉野はそれに対して学生や労働者といった草の根レベルから政治ナシヨナリズムが成長しているとした。

狭間 だからこそ、吉野は北京での五四運動の勃発から間髪を入れずに起こった東京での中国人留學生の抗議デモを支持し、彼らの釈放に奔走したのです。

馮 当時の日本で、中国や朝鮮からの留學生に対して吉野ほど献身的な援助を与えた人物は他に見当たりませぬね。

狭間 恐らくないと思います。しかも、

そうした援助は物質的なものとどまりませんでした。

吉野が組織した黎明会は中国人留學生との交流を積極的に推進しましたが、五四のリーダー、陳独秀は黎明会の活動を民主と自由を掲げる新文化運動の良き手本と見ていた。中国の初期共産主義者の一人、李大釗もこの黎明会に呼応した活動を行ないます。そして、よく知られているように、五四以後に中国で急速に普及することになるマルクス主義、レーニン主義思想は、その多くが日本の社会主義者の著作を経由したものです。

中国のマルクス・レーニン主義の形成史に占める大正日本の重要性は、石川禎浩さんの研究(『マルクス主義の伝播と中国共産党の結成』『中国国民革命の研究』京都大学人文科学研究所、一九九二、所収)なども出て、最近ようやく中国現代史の研究者にも理解され始め、若い研究者の中からこうした問題意識に基く重要な研究が現れつつありますが、若い中国知識人と吉野との間の知的サークルの解明は、そうした研究分野にも新たな地平

を開くものでしょう。五四が掲げた民主や自由、さらには社会主義、共産主義などの思想の日中に共通する性格を考えていかなばなりません。

### 戦後日本の五四評価とアナーキズム

馮 今までのお話で印象的なのは、五四運動が勃発した時点で日本の識者の反応がほとんど中国ナシヨナリズムへの言及に止まっていることです。五四運動はヴェルサイユ体制に対する異議申立てから始まった愛国運動で、しかも批判の矛先が日本に向けられたものでしたから、そうした見方が出てくるのは当然なのですが、周知のように五四運動はその前史に新文化運動という思想文化の側面からする中国改革の試みを持っています。中国大陸では五四運動の渦中から現在に至るまで、この新文化運動の性格付けや新文化運動と五四運動との関係をめぐって、さまざまな議論が闘わされたわけですが、日本ではそうした方面の論争は存在したのでしょうか。

江田 残念ながら、五四運動の文化革命としての性格に関する問題提起がなされるのは日中戦争での敗北以後です。そもそも、一九二〇年代以後に内藤湖南や吉野作造のような五四運動への言及でさえ日本の言論界で共有されることはなく、中国ナショナリズムに対する関心がほとんど消滅した果てに、日本と中国とのあの不幸な戦争が始まったということをも、まず銘記しておかねばなりません。

この戦争に敗北したことで日本の言論界では、日本軍国主義に最終的に勝利した中国ナショナリズムを思想文化の深層から理解しようという動きが初めて起つてきます。

竹内好という戦後日本を代表する思想家は、魯迅の文学を研究する中から、中国と日本の近代文化について次のような仮説を立てたのは、その代表的な例で、戦後日本の思想に大きな影響を及ぼしました。

明治維新以来の日本の近代文化は「優等生」の文化である。日本の伝統をいとも簡単に捨て去り、ヨーロッパ文明を全

面的に摂取した。その結果、表面的には近代を達成できたかに見えるが、内面の思想革命を伴わない近代化は科学技術の暴走となって日中戦争の敗北を帰結した。これに対して中国の近代文化は「劣等生」の文化である。伝統の足かせはきわめて重く、近代化への歩みは遅々として進まなかった。しかし伝統との悪戦苦闘によって、中国の近代はヨーロッパ文明の機械的模倣の域を脱し、現代と伝統との独特の融合を達成した。それが日中戦争に中国が勝利した思想的な背景なのだ。

竹内はこうした中国の近代文化を「回心」の文化とも名付けました。つまり、伝統との悪戦苦闘によって伝統を再発見する意義が強調されたのです。それは、ヨーロッパの近代への目算めが一五世紀のイタリアでまず、「文芸復興」という、ギリシャ・ローマの古典古代文化への再評価から始まったことを連想させます。

竹内の言う「回心」とは、胡適が五四運動を「文芸復興」と呼んだ見方に通ずるものです。そうした観点から、竹内は

マルクス主義の中国化を目指した毛沢東をととも重視しました。竹内の近代中国論は魯迅だけでなく、胡適や毛沢東と言った五四世代の観点を総合して形作られたものなのです。

内藤湖南や吉野作造の五四ナショナリズム論とは次元を異にした五四新文化運動論が、こうして一九四〇年代後半によくやく誕生するのです。

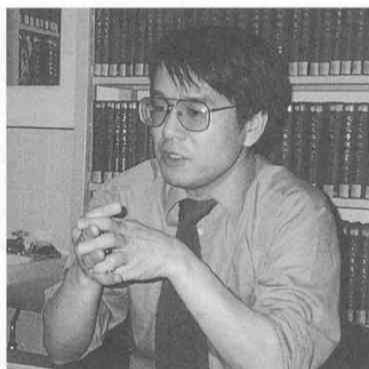
胡適たちは五四新文化運動を「文芸復興」と呼んだわけですが、現代では「啓蒙」運動と見られることの方が一般的です。日本には五四運動を「啓蒙」思想との関連から議論するような流れが出てきたことはありますか。

江田 ヨーロッパ一九世紀はいわゆる「空想社会主義」とエンゲルスに呼ばれる一連の思想を生み出します。この「空想社会主義」は一八世紀末にヨーロッパの支配思想を形成した「啓蒙」主義の一九世紀的な発展形態と言えます。アナキズム（無政府主義）はこの「空想社会主義」の重要な構成要素でしたが、日本の五四運動研究の貢献を挙げるとすれば、

五四運動に対するアナキズムの影響を明らかにしたことがその一つだと思いません。五四運動と「啓蒙」思想との関連を正面切って探るといふ方向は日本の研究に稀薄ですが、五四運動のアナキズムの性格という問題関心は、広く言えば五四の「啓蒙」的側面の探求と言えなくもない。

馮 李大釗も毛沢東も、マルクス・レーニン主義を受け入れる前段階として、アナキズムの色彩が強い「新しき村運動」を実践したり、新しきものと旧きものの「調和」や「互助」と言った考えを強調している。こうしたアナキズムの思想が多くが日本経由であるということもつと注目されるべきです。

狭間 中国アナキズムの源流には二つがあります。一つは今言われた日本で、辛亥革命以前に東京で発刊した機関紙「天義」に結集したグループのものです。もう一つはフランスで、一九一〇年代初頭に旗揚げした『新世紀』に始まり、五四時期の勤工儉学運動へと発展してきたものです。辛亥革命後の政治的高揚は政治



..... 江田憲治 [Eda Kenji]

思想全般の活発化をもたらし、師復（劉思復）と『民声』に代表される純粋なアナキズム運動の出現を見ます。それが大きな勢力になったわけでは決してありませんが、無道な政府、強権の軍閥の悪政への反対、批判の気持ちがある道と公理への思いを「無政府」に託して共鳴するかのごとき、活性化した社会的状況がそれを取り巻いて随所に出現していました。もっと云えば、中国の革新を望む当時の青年知識人の抱くもろもろの「主義」とは、アナキズムをも含めて、民衆の

幸福を追求する理想主義に大きく括れるものだったと思います。五四運動はそのような精神的風土を背景に、ナショナルリズムの運動として巻き起こったと言えるでしょう。

五四運動研究に対する日本の貢献の一つは、江田さんが今話されたように、アナキズムの流れと五四運動の関係を強調したことす。竹内好の後を受けて、一九五〇年代半ばから野原四郎、丸山幸、小野信爾と言った人たちが五四のアナキズムの性格というテーマに関して多くの新しい知見を提供しました。一九五九年の「五四」四〇周年記念に際して、野原さんが書かれた「アナキズムと五四運動」はその意味で画期的な論文です。馮 五四運動のアナキズムとしての性格を明らかにすることで、五四のどのような側面が見えてきたのでしょうか。江田 五四運動の中には極めて多元的な価値が交錯しており、その一つ一つを取り上げれば相互に矛盾する要素が少なくありません。例えば、五四には合理的な科学精神や自立した個人の価値を強調す

る「啓蒙」思想の要素が濃厚ですが、他方で郭沫若らがすぐ後に組織する創造社に代表されるような革命的「ロマン主義」も青年たちの広範な支持を得ていました。それは合理的な科学精神を否定して世界との直感的な合一や世界に対する非合理で能動的な関与を強調したのです。

また個人における自由の価値を提唱する一方で、胡適が「大我」（社会、集団）は不朽だと述べたように個人の集団への従属の必要を指摘することも忘れていません。さらに、中国の主権と独立を目指す民族国家主義の闘争でありながら、マルクス・レーニン主義を受容した結果として、世界の労働者との連帯を最終目標とした超国家主義のインターナショナル運動という側面も兼ね備えていました。

このような啓蒙主義とロマン主義、個人主義と集団主義、ナショナルリズムとインターナショナルリズムといった相互に対立する多元的な価値が、五四運動の中で極めて短期間ではありましたが共存することができたのはなぜなのか。私はこうして相互に対立する価値観を纏め上げる

上でアナキズムの思想はたいへん重要な役割を果たしたのではないかと思っています。

なぜなら、アナキズムとはあらゆる中心的な価値、支配的な価値に対してノンを付きつけ、その再検討を要求するような思想運動です。そこでは固定的な物の見方が揺さぶられ、流動化されます。

啓蒙主義、個人主義、ナショナルリズムと言った確固たる価値がそれと対立する価値と共存し得たのはアナキズムの無中心性によつてもたらされたものだと思います。

馮 では、それは思想や文化運動としてだけ考えるべきでしょうか。彼らの果たした役割はそれにとどまらないと思えますが。

江田 おっしゃるとおりだと思います。同時に私が強調したいのは、アナキズムが持っていた歴史を転回させる、起爆剤的な力です。五四運動が中国の歴史に画期的な意義を持つ運動を展開しえたのは、二つの地での、二つの運動によつてです。いうまでもなく、北京の学生運動

と、上海の三罷闘争、なかでも労働者のストライキですが、この二つを大衆運動に成長させる起爆剤となったのが、北京と上海のアナキストたちでした。すなわち、五月四日、たんなるデモに終わりがねなかつた北京の学生たちの運動に火をつけたのは（ほんとうに曹汝霖の屋敷に放火するのですが）、「工学会」、「働きながら」（工）「勉強する」（学）ことを主張する学生たちのアナキズム団体でした。

また上海では、「中華工党」という労働者団体がゼネラル・ストライキを煽動し、六月八日以降の上海に労働者の大ストライキが実現することに大きな役割を果たします。彼らは、六月五日に始まった熟練職種の労働者のストがいったん収まりかけるターニング・ポイントで、いわば「意識した少数者」として、さまざまな職種の労働者に働きかけを行ったようです。それで不熟練職種の大衆的な労働者が立ち上がる、大きなきっかけを作ったのです。

そして、この上海の中華工党のリー



ダーは、沈若仙という、学校の先生や翻訳などで生活していた、師復の流れをくむアナキスト知識人でした。こまかなことを言えば、師復がアナキズム団体に労働者を結集しようとしたアナルコ・コミニズム（無政府共産主義）の立場であったのに対し、沈若仙はこれを一歩ずつ、自ら労働者の団体に加入してこれをアナキズム化した、アナルコ・サンジカリスム（無政府工団主義）の立場でした。

沈若仙が当時の新聞に発表したものを読んでみますと、彼らの労働運動論こそが、労働者の待遇改善からゼネストによる資本制打倒までを主張しえたのでした。当時の上海の労働団体の多くが、実業の発展に協力することで労働者の地位向上を主張する、「ブルジョア労働団体」であったことを考えると、この沈若仙らの主張の意義は、どんなに強調してもしすぎということはありません。そして、一九二〇年四月以降の陳独秀らマルクス主義者による労働者の組織化は、彼らの運動を受け継ぐものであったということ

ができます。

ですから五四運動を、北京でも上海でも、決定的な場面で転回させたのは、ともにアナキストだったのです。本来思想的にはインターナショナルで、万国統一やエスペラントを主張するアナキストが、ナショナルな課題をもつ五四運動で大きな役割を果たしたことの意義は、強調されてしかるべきです。

ただ、総ての権力を否定するアナキストたちが、持続的な運動を担い得なかったことも確かです。彼らの組織論、「小団体の連合による大団体の形成」も、もちろん集権的な組織形成を意味しません。小団体同士は平等なのです、大団体への参加も、そこからの離脱も自由なものと考えられていました。これでは、マルクス主義に対抗できなかったのも仕方ありません。だから、彼らの役割とは、繰り返して言いますが、歴史の転換点における起爆剤であったと総括しうるかもしれません。そして、中国近現代史におけるアナキズムの最も重要な活躍の場が、五四運動だったと私は考えます。

## 『五四運動の研究』の目指したもの

馮 そろそろこのあたりで、狭間先生や江田先生が従事した共同研究『五四運動の研究』についてお話を伺いたいと思います。『五四運動の研究』（全五函、一八分冊、同朋舎出版、一九八二—一九九二）は出版当初から中国大陸の学術刊行物でも紹介され、海外でなされた総合的な五四運動研究として私たち中国の学者からもたいへん重視されている研究書ですが、『五四運動の研究』が一九八二年から一九九二年という長期にわたって出版されているのが、私たちにはたいへん印象的です。

狭間 京都大学人文科学研究所では一九七二年までの小野川秀美・島田虔次両先生を班長とする「辛亥革命研究」班を受けて、一九七三年四月から一九七八年三月の五年間にわたり、島田虔次先生を班長として「五四運動の研究」班が組織されました（島田先生が文学部に移られ、班長は竹内実先生、さらに狭間と変わり

ます)。特徴的なのは、一九七八年に終了した研究の報告論文集が一九八二年から一九九二年という十年の長きにわたって刊行されたことです。

そうだったのは「五四運動の研究」班の取り組み方に起因するのですが、共同研究を行なうにあたって班員の共通の認識基盤をつくろうと考えて、時代精神を反映する雑誌を「会説」方式で読むことから始めたためです。まず、いうまでもなく、『新青年』を取り上げました。もちろん全部を読む時間はないので、一人が二号ずつ担当し、その中で重要論文若干篇は詳細な要約をし、その他のものは簡単な紹介を行なうというやり方を採りました。ついで、『少年中国』『新潮』『建設』『解放与改造』『改造』『国民』『曙光』『甲寅』『孔教会雑誌』『前鋒』『少年』『赤光』『小説月報』『共産党』『嚮導』（毎週評論）『星期評論』等の重要雑誌が含まれてないのは、当時の京都に無かったため。これらは、各誌の内容と分量に応じて、それぞれ一―五回をかけてこなししました。この方式は、さして難解ではない

大量の文献についての概略を把握するのによかったのですが、時間も喰ってしまいました。そこへ、改革開放政策による大量の基礎資料刊行の波が「五四」六〇周年を機として押し寄せたのですから、それを取り入れながらの論文集刊行に、結局、十余年を要してしまっただけです。

また、報告論文集刊行の間に、私たちは一九八九年の「六四」天安門事件という大事件を経験しました。「五四運動の研究」は学術研究ではあるものの、一九七八年末の改革開放政策への大転換と一九八九年の「六四」事件という二つのエポック・メイキングに遭遇することで、否応なく現代中国に対する私たち研究者のスタンスをも問われる結果となりました。馮 七八年と八九年の事件は「五四運動の研究」にどのような影響を与えることになったのでしょうか。江田 簡単に言ってしまうと、七八年は五四に関する資料の公開化を促し、八九年は五四に関する視点の根本的变化を促したと言うことができます。狭間 まず、七八年です。改革開放が旗

揚げた七八年の明るく七九年は「五四」六〇周年で、大陸では記念論文集が編集されると同時に、五四関連の档案資料、特に各地域における五四運動に関する資料が続々と出版されました。五九年に出た『五四時期刊介紹』などのわずかな資料を頼りに進めてきた研究班の活動を、こうした豊富な資料で肉付けすることが可能になった。

八〇年代で何と言っても重要なのは『民国日報』の復刊でしょう。確かに『毎週評論』など七種の五四時期刊行物は改革開放以前も、しかるべき伝手をたどれば大陸の友人を通じて見ることはできました。だが、一次資料が国内外を問わず社会に開かれた形で公開されることの意味は、いくら強調しても足りません。

馮 先生のような大陸の学者の方でも、本来档案馆にあるはずの資料の閲覧が当時は大幅に禁止されており、海外の私たちと同じように人的なコネクションを通じてしかそれにアクセスできなかったのではないのでしょうか。

馮 中国には「級別」(ランク)という独

特の制度があつて、「級別」によつてアクセスできる資料も等級化されています。「級別」が上になればなるほど、資料の提供が拡大する。そうやつて党と政府は情報操作を行うのです。改革開放以後、この「級別」による情報管理は大幅に緩和されました。

狭間 改革開放以前にも、五四の「回憶録」はありました。だが、当時の歴史的現実と対照させないと、後の「高み」から整理された主観を通じての「回憶」五四像に振り回されるばかりで、歴史のほんとうの姿はなかなか見えてきません。档案資料を含む第一次資料の大量の公開は、その意味で画期的でした。

新中国成立後は毛沢東の新民主主義革命史に基いて現代中国を描くやり方が一般的でした。五四運動は、中国革命の段階が旧民主主義から新民主主義に転換する画期であり、中国の「現代」は五四から始まるとされるのです。ただ、改革開放以前は資料の少なさが原因で、こうした歴史観（イデオロギー）に基づく記述が公式見解的な権威をもつ機械的叙述と

なり、中国共産党やマルクス・レーニン主義役割が非歴史主義的に強調されることもありました。ですから、そのような不当な偏向は正されねばなりません。同時に、五四の湧きたぎる坩堝のなかから共産党が生みだされたこと、中華人民共和国が創られたことも否定しようのない厳然たる事実なのです。中国社会科学院近代史研究所の『中華民国史』（一九八七）、未定になりますと、イデオロギーはしだいに薄まり、本格的な実証に裏付けられた叙述が支配的になりました。

### 八九年の事件と五四研究

馮 江田先生のお話ですと、八九年は五四に関する視点の根本的变化をもたらしたとのことですが、中国大陸の五四研究を見る限り全く同感です。日本における五四研究の決定的変化は、八九年前後に中国大陸で行われた五四議論のどのような側面に注目してのものでしょうか。

江田 八九年前後に大陸で大量に流布した五四に関する言説は二つの非常に顕著

な方向を持つていたと思うのです。

一つは、五四は中国の民族的な伝統を粉々に破壊してしまつたのだ、今や五四で破壊された民族伝統を回復しなければならぬという主張です。それまでのように「文革復興」とか「啓蒙」といった切り口から五四を肯定的に見るのではない。むしろ、五四が目指した世界性を持った文化・文明創出の試み、「啓蒙」の主張こそが民族の伝統に対する叛逆に他ならないと述べ、五四「啓蒙」の試みを「民族虚無主義」と批判しました。この観点を唱えた代表的論客に、「六四」以後、権威主義政治の擁護者へと転向を遂げる何新がいます。

もう一つの見方は李沢厚に代表されます。李沢厚も五四を全面的に肯定するものではありません。ただ何新とは違って、五四の限界は「啓蒙」の主張に表れているのではなく、むしろ「啓蒙」が不十分で「啓蒙」という課題が未完のまま終わったことにあると言います。なぜ五四「啓蒙」の課題は中途で断ち切られたのか。李沢厚によれば、帝国主義の侵略をはね

かえし、中国を近代国家へと転換させる  
国民国家創設の運動、李沢厚の呼び方では「救亡」運動の展開が「啓蒙」のさらなる発展を抑制したからです。こうして李沢厚は中途で挫折した「啓蒙」の課題を八〇年代に受け継ぎ完成させようと、青年たちに訴えたのです。

興味深いのは、何新と李沢厚の五四運動論が「啓蒙」評価をめぐって正反対の議論を展開したこと。何新によれば、現代中国に民族虚無主義をもたらした元凶は「啓蒙」に他ならない。だが、李沢厚によれば、五四の問題は、時代状況から、「啓蒙」が不十分に終わってしまったところにあります。

「啓蒙」を否定するのか、それをさらに発展させるのか。八九年の直前に、中国の言論界は五四と「啓蒙」をめぐって白熱した議論を展開します。

若者の圧倒的多数は李沢厚の考えを支持し、「新啓蒙」を旗印に「中国伝統」（ここには新中国成立後の社会主義的な「新伝統」も含まれます）との全面的対決、「全面的ヨーロッパ化」の道を選び、

権力と直接対峙するにいたりました。

「六四」天安門事件は青年たちの「民族虚無主義」がもたらした動乱であるというのが中国政府の公式見解であり、学生運動を除で操作したと弾劾された中には、「啓蒙」の復権を主張した李沢厚の名もあつた。李沢厚は、若者に「啓蒙」を鼓吹することで、彼らの民族虚無主義を助長したと非難されました。何新が五四に向けた非難が今や李沢厚にも向けられたのです。

もつとも李沢厚を「民族虚無主義」の提唱者と言う当局の非難は、五四運動に対する評価を慎重にも留保しています。

毛沢東以来、五四精神は中国共産党の支配の正当性を支える最も重要な資源であつたのですから、何新のように五四そのものを「民族虚無主義」の元凶と決めつけることができるはずがありません。八九年の事件を通じて傷ついた五四の威信を立て直すべく、九〇年代に打ち出される権力側の五四像が「五四愛国精神」でありました。

馮 北京大学で今年（九九年）開催され

たばかりの五四運動八〇周年シンポジウムでも、五四のスローガンは「愛国」「科学」であり「民主」は後景に退いています。

狭間 八九年の雰囲気は全く違つてましたね。私は学生デモが渦巻く一九八九年五月四日に北京で五四運動七〇周年記念シンポジウムに参加する機会がありましたが、その開幕式の討論会において、陳独秀研究で名高いある研究者が、陳独秀の主張した「民主」の考えにこそ五四運動の原点があるのだと述べた発言に強い印象を受け、中国の五四研究における清  
新な潮流の台頭を肌で感じた記憶があります。その時には、十年來の開放改革が国民国家形成の中心課題である民主の確立へと向かうのだろうと樂觀的に考えて、デモ隊の横の歩道を同伴したものです。しかしかの「六四」で、あの澀刺たる雰囲気は失われました。歴史とはそういうもので、目標や理想はいつも「逃げ水」でしかないでしょうが、五四の不運はやはり尋常ではないと思えます。

江田 新文化運動（啓蒙）と五四運動（救亡、愛国）は連続的に捉えられるべきも

のだと思うのです。当時の運動の推進者たちは、民国の政治腐敗の根源には近代以来の倫理文化の衰弱があり、政治腐敗を一掃し、自立した近代国家を樹立するために、倫理文化面における「啓蒙」が必要だと考えたのです。つまり、新文化運動の「啓蒙」の主張は、元来が五四の「愛国」精神と矛盾するものではなかった。五四運動の真実とは、「啓蒙」倫理による反帝「愛国」という方向にあったのではないのでしょうか。

馮 その意味では、啓蒙と愛国（救亡）を切り離して捉える何新、李沢厚の見方は、いずれも充分とは言えません。例えば、何新のいうように五四が民族虚無主義しか生み出さなかったのなら、その五四の渦中からなぜ伝統への回帰を主張する新儒家の流れが出てきたのか説明することができなくなります。新儒家を五四の単なる反動と考える見方は学界ではとくに否定されています。

江田 ただ、新文化運動と五四を連続した出来事と見ることで、啓蒙と愛国（救亡）の課題の表裏一体性は理解できると

思うのですが、今言われた「反伝統」と「伝統回帰」の問題は整合的に説明できるでしょうか。つまり、激しい反伝統を標榜した新文化運動と五四が、実は伝統に対する再評価を含んだ運動であったというの、どのように説明できるのでしょうか。

馮 林毓生先生の著書が一九八八年に『中国意識の危機』（貴州人民出版社、一九八八）と題されて大陸で翻訳出版され、当時の五四議論に巨大な影響を与えたこととはご存知だと思います。先生がこの書物で提示した仮説が、今言われた問題点を解くかぎを与えてくれます。林毓生先生の議論はこうです。

新文化運動と五四運動を貫く反伝統主義は、「総体主義的な反伝統」と要約できる。五四の思想家たちがそうした「総体主義的な反伝統」のアイデアをどこから得たかといえば、中国伝統に存在した「思想文化アプローチ」からであった。「思想文化アプローチ」とは、有効な社会変革が技術や制度のレベルではなく、思想文化のレベルにおいてしか可能ではないと

いう方法論のことで、思想文化による変革である以上、部分的な漸進的改革は意味がなく、総体主義的でラディカルな革命こそ全てだと主張するものである。こうした「思想文化アプローチ」は儒教を中心とする長い中国伝統の中で育まれた。五四の思想家の「総体主義的な反伝統」の姿勢は、そうした伝統的な「思想文化アプローチ」によって始めて可能になったものである。

言いかえれば、新文化運動と五四の言論の内容は「反伝統」だが、それを支えるエートスは「伝統的」だということです。

江田 すると、五四によって確立されたと言われる「現代」や「近代精神」は全て、それらを無意識のレベルで支えている「伝統」による「誤謬」の産物だということになりませんか。そうした観点は何新とは違った意味で、五四全否定に向かう可能性を持っておりませぬ。

馮 林毓生先生は五四以後の中国知識人の政治との関り方が「中国伝統士大夫の誠の精神」を継承したものと捉え、マツ

クス・ウェーバーが言うような「責任倫理」を欠如していると非難し、それが文化大革命にまで及ぶ政治の荒廢の根源をなしたとも述べています。

## 文化大革命と五四運動

狭間 文化大革命のさなかの一九六九年になされた五四記念で最も強調されたのは、「五四が「大民主」の新しいページを開いたということでした。極左時代の中国共産党による五四評価の基軸が「啓蒙」「愛国」以上に「民主」、それも「大民主」に置かれていたことを、どう考えるべきでしょうか。

馮 アメリカの余英時先生が一九八八年に香港中文大学二五周年記念の席上で行った講演に「近代中国の保守とラディカル」というたいへん有名なものがあります。先生の議論をまとめますと、こうなります。

一八九五年の日清戦争敗北後、本格的な体制改革の論議は、年を追うごとに過激化し、五四運動にいたって、ラディ

カリズムは思想界の主流となる。反面、ヨーロッパ政治思想ではラディカリズムを沈静化する上で重要な役割を果たした保守主義は全く無力化した。中国共産党はこのラディカリズムの潮流の申し子であるが、保守主義だけではなくリベラリズムのわずかな芽生えでさえ抑圧し続けた代償として、文化大革命という極左思想の鬼子を産み落とすことになった。その実、文化大革命は五四運動で思想の首領の位置に就いたラディカリズムの極限形態に他ならない。中国近現代思想はラ



馮 天瑜[Feng Tianyu] .....

ディカリズムのより一層の急進化の歴史と捉えることができる。

余英時先生の議論で特に激しい論争を呼んだのが、文化大革命の思想起源を五四に求める見解だったことは言うまでもありません。大陸の学者の眼には、そうした見方が五四の神聖さに対する許しがたい冒瀆に見えました。彼らの反論の中心を占めるのは、五四のスローガンである「民主」と文化大革命の「大民主」との根本的な相違の指摘です。彼らによれば、五四の「民主」は個人の自由な人格を前提にした人権論ですが、「大民主」は熱狂的な個人崇拜を前提に権力の側から発動された画一主義でした。「大民主」は「民主」の名に全く値しないというのです。

狭間 「大民主」にはもちろん大きな問題点があるでしょう。だが、それを全面否定するというのは改革開放時代が生んだ新種のイデオロギーではないでしょうか。

毛沢東のいう「大民主」に権力の側から発動したマスゲームという側面がある

のは確かです。それは新中国の動員型政治の産物であり、制度的な裏付けなしにイデオロギーと情念によって擬似的な大衆行動を想像（イマジネール）させる装置でした。現代中国が政治腐敗の撤廃の手段として、「三講教育」（学習を講じる、政治を講じる、正気を講じる）による幹部の再審査と再教育を今だに掲げるのは、そうした動員型政治の名残です。

だが歴史的に見るならば、「大民主」の構想は、五四期に毛沢東が書いた有名な論文「民衆の大連合」の精神の延長上にあります。ここで毛沢東は、代議制や軍閥政治といった旧来の政治手法や政治勢力では捉えきれない新しいタイプの社会組織が自由に連合して共和制を協同して構築していくヴィジョンを提示しようとしたのです。

「大民主」の掛け声で立ち上がった様々な造反グループが全て、権力に蹴らされたマスメームしか演じなかったと考えれば、それは逆の意味での歴史の忘却となるのではないのでしょうか。紅衛兵運動は中国の民衆に始めて自分の頭で考え行

動することを可能にした壮大な実験という一面を確かに持っていたと思います。

五四時期に模索された民衆の自由な連合と協同のあり方が、半世紀を経た共産党支配下の歴史舞台において、「大民主」の形をとって現れたと言うことではないでしょうか。

馮 毛沢東は、中国の風土では「大民主」はやれても「小民主」はやれないと述べました。今流の言い方をしますと、欧米の議会制民主主義を中国で行なうことは不可能で、中国の特色を持った社会主義、社会主義民主を推進すべきだと述べたわけです。

江田 「民主」が人々の自由な討論を保障し、人々の多様な価値観を許容する制度的・思想的なシステムだとすると、中国では「大民主」は良いが「小民主」はダメ、中国の特色を持った社会主義が良いが、議会制民主主義はダメという物言いですが、そもそも「非民主」的だという気がします。「大民主」も良いし「小民主」も良い、中国の特色を持った社会主義も良いし議会制民主主義も良いとしなければ

いけない。

狭間 「大民主」「小民主」の考えを毛沢東が詳しく述べたのが、一九五七年のいわゆる「人民内部の矛盾」の講演です。

翌年から始まる反右派闘争で、毛沢東は、「小民主」を行なう者に人民外部という烙印を押し、弾劾した。その数は五百万と言われますが、国家権力による人民の区分けというか困い込みがなされた時点で、「大民主」が内包していた「民衆の大連合」というユートピア構想が毛沢東の内部で崩壊した気がします。

馮 五四が中国ラディカリズムの温床であると余英時先生が言うとき、アナキズムが彼の念頭にあったことも間違いありません。

江田 アナキズムが保守主義やリベリズムをなぎ倒し、ラディカリズムあるいは文革の温床となったという議論も、「民主」「大民主」の議論と同じように、歴史の因果関係を歪めて考えるものです。日本の五四研究が明らかにしたように、五四の時代には保守主義やリベリズム、社会主義、共産主義、新儒家さえ

もアナーキズムという大きな思想母胎の一構成要素にすぎなかった。保守主義、リベラリズム、社会主義は五四期の少なくとも前期は独立した思想とはなりえませんでした。アナーキズムをこれらの思想から分離して非難するのではなく、アナーキズムとこれらの思想の内在的關係を究明する方がよほど生産的ではないでしょうか。

### 新民主主義論をどう位置付けるか

馮 五四運動は「啓蒙」を生み、「愛国」を生み、「民主」を生み、「ラディカリズム」を生みましたが、同時にそれら全てでもない。五四の本質を、私たちはどの場面に求めるべきでしょうか。

狭間 先ほど話に出た『五四運動の研究』に、私は「五四運動研究序説」という文章を書きました（一九八三年）。一九一九年の六月八日から一〇日にかけて起つた上海労働者ストライキの過程の中に社会革命の質的な飛躍を探ったのですが、社会革命のそうした質的な飛躍はやはり

「新民主主義革命」という表現を用いるのが妥当だという結論を得ました。私のこの見解は後に、毛沢東の「新民主主義論」のパラダイムを無批判に用いたものという批判を受けました。

しかし、私が「新民主主義革命」という言葉によって語りたかったことは、先ほどの「大民主」の議論でも触れたように、五四運動を通じて、議会や軍閥といった旧来の政治勢力分布からはみ出す新しいタイプの社会組織や集団が革命の担い手、国家の構成分子として登場してくる事態でした。吉野作造が同時代の眼で鋭く見ぬいたように、若い学生やインテリゲンチヤは学生連合会や社会主義関係の研究会を組織する中で、中国史上初めて本格的な改革の旗手として政治の世界に姿を現します。上海での学生連合会・工商連合会や労働組合の意思決定が上海のみならず全国の世論を直接に動かしてゆくようになる。まさに「民衆の大連合」が徐々に形成されつつある、と渦中にあった人々には感じ取られたはずで、馮 新民主主義という考え方は改革開放

以後、中国大陸ではむしろ復権した観があります。周知の通り、新中国は建国当初、国家の基本方針を新民主主義社会の建設とし、この方針を少なくとも二〇年から三〇年にわたって継続させるとしていました。一九四九年に劉少奇が行った天津講話には、商品経済を消滅させるのではなく、それに一定の保護を与えることが明記されている。

ところが、一九五〇年代半ばから国内的、国際的なさまざまな事情に迫られ、毛沢東はこの新民主主義構想を放棄して、より急進的な社会主義改造に踏み切ります。商品経済は全て社会主義改造の対象となりました。

一九七八年の改革開放はこうして一旦消滅した商品経済を復活させ、公有制という社会主義経済の柱に、私営企業、個人企業、合弁企業といった多様な経済要素を加えることに主眼を置きました。ですから言葉こそ違え、社会主義市場経済とは新民主主義の現代版と言って差し支えありません。新民主主義によって現代中国の社会現象を論ずることには政治



的・経済的な合理性があります。

狭間 近現代の中国の社会運動では、運動する主体である民衆と、運動を組織し指導する実践者が分離する傾向を長く脱することができませんでした。民衆が運動の主体であると同時に、その組織者であり指導者になる、つまり、国民としての歴史の主人公の位置を自覚する瞬間が、旧民主主義から新民主主義への転換点であるはずですが、それは一体いつ実現したのか、あるいは、まだ実現していないのか。

「五四運動の研究」以後、私たちの研究テーマは、「民国初期の文化と社会」（一九七八年四月―一九八三年三月）、「国民革命の研究」（一九八三年四月―一九八八年三月）、「一九二〇年代の中国」（一九八八年四月―一九九三年三月）を経て、「梁啓超研究」（一九九三年四月―一九九七年三月）のインターヴァルをおいた上で、現在の「中国共産主義と日本」にいたっています。民衆の覚醒と国民の形成という観点こそ私たちの一貫した研究モチーフでありました。

新民主主義を狭義の政治概念として用いるのではなく、広義の国民の形成史として用いたとき、五四運動は「啓蒙」「文芸復興」「愛国」「救亡」「民主」といったさまざまなスローガンのせめぎあいの中でありながら、今までより鮮明な映像を結ぶのではないかと考えるのです。

二〇世紀の歴史を革命と国家の視点から見直す際、マルクス・レーニン主義が構想したプロレタリアート独裁国家ヴィジョンを壮大な失敗劇とだけ片付けるのではなく、五四運動によって産声を上げた新民主主義ヴィジョンを含め、ユートピア社会主義が持っていた無階級社会、平等社会ヴィジョンに改めて注目することで、二〇世紀の持った意義を再考してゆきたいと思います。

馮 ありがとうございます。

（一九九九年五月二日）

（文責 緒形康）